

てんびんの詩 DVD 貸し出しについて

地区協議会の際 ご覧いただいた「てんびんの詩」DVD のダイジェスト版(50分程度)を各クラブに貸出しを行いません。尚、上映時間の関係で例会延長なり、早送りされます様ご注意ください

激化の一途をたどるビジネス・経済環境。果敢に企業の明日を切り拓く優れた「人材」「魂」は、どのようにして育めばよいのか。あらためて「近江商人」を採り上げ、その商いの精神を、父母はもとより地域一体となつての愛と確信に満ちた後継者育成を探ってみました。

あ・ら・す・じ

物語は近江商人の家に生まれた主人公・近藤大作が小学校を卒業するところからはじまる。

父親から祝いの言葉と共に、包を贈られる。中に入っていたのは鍋蓋だった。なんの変哲もない鍋蓋が大作の将来を決めることになる。父親は彼にそれを売ってこいというのだ。それを売ることもできないようなら商家跡継ぎにはできないと...

店に出入りする者の家を回るが、親の威光を嵩にきた押し売りのような商いがうまくゆくはずもない。

さりとして、見知らぬ家を訪ねても、けんもほろろ、ろくに口さえきいてもらえない。親をうらみ、買わない人々をにくむ大作...

行商人にならないもみ手の卑屈な演技をし、時にはものごいをまねた



り、農家の老夫婦を泣き落としにかかったりもするが、しょせん、うそとまねごと。心のない商いは人々の反感を買うだけだ。

いつしか大作の目には涙が…。そんなある日、「鍋蓋が無うなったら困るやろな。困ったら買うてくれるかもしれん」しかし、その次の瞬間「この鍋蓋も誰かが自分のように難儀して売った鍋蓋かもしれん。」と思う。

大作はただ無心に鍋蓋を洗い始める…。近づく足音にも気づかない大作。「何で、うちの鍋、洗ろうたりしてる。お前どこのもん。」大作、思わずその場に手をつけて「かんにんして下さい。わし悪い奴です…。なんにも売れんかったんやないんです。モノ売る気持ちもできてなかったんです。」

彼の顔をふいてくれる女。それは、母親が実の子にする愛の行為そのものだった。そして、大作が我が子と同じ十三歳と知った女は、彼の鍋蓋を売ってくれという。売れたのである。はじめて、売れたのである。

「売ればわかる」といった父親の言葉の意味を大作は知る。売る者と買うものの心が通わなければ、モノは売れないということ。人の道にはずれて、商いはないということ。...



申込先

地区ガバナー事務所

TEL 048-827-0022